特定非営利活動法人
アフリカ支援

アサンテ　ナゴヤ

2010 冬 ニュースレター

特集　９月渡航　寄稿文

ゲスト

日本医科大学　内科医師
近江恭子

日本医科大学　小児科医師
稲垣真一郎

慶応義塾大学　眼科医師
稲垣絵海

グラクソ・スミスクライン(株)
石川博司（薬剤師）

リサーチ・レジデント(名古屋医療センター)
服部純子

一宮中ライオンズクラブ　会長
深川善治
佐野考宏

＊ **石川佳子**
＊ **内海　眞**
＊ **岩崎奈美**

渡航日程表

参加者集合！

稲垣真一郎・稲垣絵海・近江恭子・
深川善治・佐野考宏・石川博司
服部純子・上田祥夫・上田敏子
内海眞・石川佳子・岩崎奈美

「第１回ゲム村無料医療キャンプに参加して」

理事　石川　佳子

平素は、私どもアフリカ支援アサンテ ナゴヤの活動にご理解・ご支援を賜り、誠にありがとうございます。先日の総会におきまして２０１１年度の活動のご認証をいただき、おかげさまで私どもの活動もアサンテ ナゴヤに改称後、３年目を迎えることができました。

今年９月にケニア・ゲム村で行われました第１回無料医療キャンプの様子をお伝えします。

今回の渡航におきましても、新たな出会い・感動が多くありました。そしてそこには、いろいろな方々のご尽力やご協力があり、その上で私たちの医療キャンプが成り立っていることをあらためて感じさせていただきました。関わってくださった全ての方々に心から感謝致します。

ではまず、今回のアサンテチームの参加者の方々をご紹介しましょう。

医療チームの医師団としては、我がチームリーダー・内海 Dr.(内科)、そして東京から駆けつけてくださった三人の若い先生方、稲垣真一郎 Dr.(小児科)、稲垣絵海 Dr.(眼科)、近江恭子 Dr.(内科)のいう多彩なメンバーでした。三人の若手の先生方は、皆さんとても美男・美女で、そのうえとても素直ないい性格の方々ですので、私たちおじさん・おばさんは初対面のとき、「神は、二物も三物も与えるんだね！」と、興奮気味に語ったものです。

先生方は、初めてのアフリカ、それもいままで経験されたことのないような環境のなかでの診療に、とても奮闘し

てくださいました。いろいろな想いを持たれたことと思います。それぞれの先生方の寄稿文をお楽しみください。若い先生方が加わってくださったことは今度の私達の活動にとても力となることでしょう。

勿論、文字通りチームリーダーの内海先生は、毎日陣頭指揮を執ってくださり、診療に、いろいろな調整にと、大変忙しくされていました。先生の熱い想いは、先生の報告書を読んでいただければおわかりのことと思います。

薬剤部は、やはり東京から参加のグラクソ・スミスクライン（株）の石川博司さん（薬剤師）、私たちアサンテ ナゴヤと現地のＮＧＯとを結びつけてくださった薬剤師の讃岐さんです。お二人とも炎天下の中、少ない薬剤のやり繰りに四苦八苦されていました。

検査部門は、名古屋医療センターの服部純子さんが大活躍され、毎日多くの方々の採血をされ、ホテルに帰ってからは、グラクソの石川さんと共に夜遅くまで検体の検査をしてくださいました。現地ゲム村での HIV 感染率は、予想通りとても高く２０％を超えていました。

そして鍼灸部門は、私・石川と事務局の岩崎さんでチームワークを組んで、居並ぶ患者さんに対応させていただきました。多くの方々が全く経験したことのない鍼灸治療を受けてくださいましたが、もう少し時間をかけて丁寧な診療をしてあげたかったと、反省しています。次回はもう少し工夫をしようと思います。

岩崎さんは事務方全般を引き受けてくださいました。渡航の諸手続きや細部に渉る準備を周到にしてくださり、現地においては会計という重要な役割もしてくださいましたので、いろいろご苦労をおかけしたことと思います。そのうえ、現地のＮＧＯのお母さん方と協力して、とてもおいしいお昼ご飯を作ってくださり、若い先生方は歓声を挙げていました。もちろん、若くない私たちもとても嬉しく、美味しくいただきました。岩崎さんには、私たち全員がとても感謝をしています。これは、今回に限ったことではありませんが･･･。

診療は９月１８日～２２日の５日間でしたが、患者さんは毎日溢れるように集まり、先生方は昼食を食べる間もなく、必死で診療されていました。受付を途中で打ち切り、翌日に再度来ていただくという日々でした。患者さんの中には、随分遠くから徒歩で来てくださっている方々もおいでになり、お気の毒でしたが致し方ありませんでした。

今回のアサンテチームには、医療団のほかに私たちアサンテ ナゴヤを通して、現地の方々に検診車としてトヨタ・ハイエースを贈ってくださった一宮中ライオンズクラブの方々も参加してくださいました。

現５０代会長の深川さんは２年前から私たちにコンタクトを取ってくださり、ケニアのエイズ問題にとても関心を持たれ、検診車の贈呈を申し出てくださいました。車が現地に到着するまでの間、前会長の佐野さんと共に様々な問題を抱えられ、大変な思いをされたことでしょうが、今回、現地での車の大活躍にホッと胸を撫で下ろしておいでのことと思います。この車は今後、現地の方々の健康のために大いに役立つことでしょう。一宮中ライオンズクラブの方々に、改めてお礼申し上げます。

一宮中ライオンズクラブ関係の方々で参加いただいたのは、深川さんのお友達の上田さんご夫妻と佐野考宏さんです。皆さんは、現地の子供たちとの交流に一役買ってくださいました。今回は、支援してくださる皆さんのご好意で、おみやげに縄跳び・ボールなどを用意し、みんなで楽しく遊んでもらいました。ご協力くださった方々、ありがとうございました。

今後のわれわれの活動のあり方を模索するた

めの、現地の方々とのミーティングにおいては、いろいろな希望・要望が出されました。現地の方々の医療を求める想いは強く、「病院が欲しい」と何度も言っていました。でもそれは、私たちＮＰＯの力だけでは何ともなりません。内海先生も、「難しい」とはっきりと皆さんにお伝えしました。私たちは第一歩を歩み出したばかりです。診療所ならば、いつか可能かもしれません。

まずできることから、そして緊急性の高いことから始めようということで、現地の方々との間で確認できたのは、皆さんの健康のために是非とも必要な「清潔な水」を確保するための井戸を作ろうということです。

この事業に関しましては、現在、ケニアにて井戸掘り活動をされているＮＰＯや、神戸先生方にご相談しながら進めていく予定です。いろいろな方々のご意見やアドバイスを受けながら、一歩ずつ進めていく所存です。

今後とも皆様方のお力をお借りすることになると思いますが、よろしくお願い致します。

今後の課題としましては、現地の子供たちの教育環境の整備も考えなくてはなりません。子供たちは無邪気で、その目はとても輝いています。きっと、将来の夢や希望に溢れていることと思います。ゲム村には、私たちが医療キャンプをした近くに学校があります。その学校と連携がとれないかと模索中です。また、学校に通えないような子供たちがいるとしたら、どうしたら良いか？ということも考えていかなければなりません。

いずれにしましても、それぞれの事業に関して、現地のＮＧＯ団体・ルーネルドのメンバーの方々と相談しながら進めていかねばなりませんし、現地の住民の方々の協力が欠かせません。私たちは、現地の文化についてまだ良く理解できていないところもあり、考え方の違いに戸惑うことも多くあります。今後いろいろな調整が必要と思われます。

今回、現地におきましては、讃岐さんのお友達でゲム村のルーネルドのメンバーのまとめ役である、メリーさんとそのご家族（牧師様のお父様、やさしいお母様、元気な弟さん）や、ルーネルドの中心メンバーであるダグラスさんには、特にお世話になりました。皆さんは私の拙い英語を何とか理解しようとしてくださいましたが、その際、讃岐さんに随分助けていただきました。皆さん、本当にありがとうございました。そして、これからもよろしくお願い致します。

ゲム村での診療を終えた私たちは、讃岐さんの支援活動の拠点である、ナイロビのスラム地区・コロゴッチョを、昨年の春同様訪れ、少し診療をさせていただきました。ここでの中心メンバーである、HIV 陽性者のローズメリーさんの強い意志に、私たちは逆に力づけられました。讃岐さんが彼女たちを支えていこうと思われたのがよくわかる気がしました。彼女の健康と今後の健闘を祈らざるをえません。

以上、今回の医療キャンプにつきまして簡単ではありますが、全容をご報告させていただきました。それぞれの部門に参加してくださった方々がお寄せくださった寄稿文をお楽しみください。

私たちの活動は、皆様方の温かいご支援で成り立っております。どうぞ、今後ともよろしくお願い致します。

またご意見・ご提案等ございましたら、事務局までご連絡くださいませ。

「ケニアの思い出」

日本医科大学　内科医師　　近江恭子

この度は、アサンテ・ナゴヤの医療支援活動に参加させて頂き誠にありがとうございます。実に刺激的な素晴らしい旅でした。ここでは、参加した経緯、旅の中で特に印象的だったことを、日を追って綴りたいと思います。

アフリカには、日本では考えられないような劣悪な境遇に生まれ育ち、医療にも見放されている人々がいるという現実は、ずっと頭の片隅で気になっていても、忍耐力が無い自分には海外での医療活動など出来るはずがない、と諦めていました。そんな中で、ＧＳＫの石川さんからアサンテ・ナゴヤの活動について聞き、私も参加させて頂けるとのお返事をもらった時は、本当に嬉しかったです。

しかし、出発が近づくと、感染症やら治安やらが心配で無事に日本に戻れるのかと不安になり、最後に空港で母親に電話した時は「色々ありがとう」という声が震えてしまいました。

いざ、日本を立ちドバイ・ナイロビ経由でキスム空港に降り立ちました。そこには、この旅の訪問地で支援活動をしている讃岐さんが迎えに来てくれていました。キスム空港から車（lion's club presented）で２時間程のキシーの街のホテルに着いた時は、ちょっとびっくりしてしまいました。快適とは言い難いホテルに入り、美味しいとは言い難い夕食を頂いた時は、既に日本が恋しくなってしまいました。

翌日から、キシーから車で１時間のGEMEAST 村に通い、メディカルキャンプを行いました。一生に１回？医者に診てもらおう、という人々が長い列を作り、私はひたすら数をこなさなければ、という焦りに加え、対症療法しか行えていないことへの無念さもつのり、毎日終了時には疲れきってしまいました。そんな時に岩崎さん・石川さん方が用意して下さった日本食を頂き、その信じられないくらいの美味しさでまた元気を取り戻すことができました。

ところで、村の患者さん達は、薬をもらうだけでまるで一生の健康を手にしたかのように満足しており、病気やその予防についての知識が乏しいようなのです。ＧＥＭ村の自然を保ちながら、人々が健康に暮らしていけるように、薬よりも予防が大切だということを、理解してもらえる日が来て欲しいです。

やっとのことで５日間のキャンプを終え、ナイロビへ向かいました。キシーでの数日間で自分の贅沢癖が矯正されたためか、ナイロビのホテルはとても快適でした。（初日のシャワーはお湯ではなく水でしたが・・・）

翌日は、ナイロビ市内にあるコロゴッチョスラムを訪れ、讃岐さんが支援しているＨＩＶ感染女性グループの活動場所を見学しました。讃岐さんは３年前に女性グループの一人であるローズマリーに出会い、彼女がＨＩＶ感染や貧しさを乗り越え、助け合いながら強く生きている姿に感動し（ローズマリーは４人の子を持つシングルマザーで、スラムに住み、大変貧しいにも関わらず、病気で苦しむ人の家を訪ねては、自分の賄いでご飯を食べさせているのです！）彼女達の支援を始めたそうです。そして彼女達が自立出来るようにと創意工夫を重ね、今では彼女達の得意技である裁縫等を活かし、作品（エプロンやシュシュなどで、飛びついてしまったほどカワイイのです）を日本に売り、その代金を彼女たちに還元しているのです。

ローズマリーも讃岐さんも、助けた人の喜びが

自分自身の喜びであると素直に感じている様子で、大変な日常にもかかわらず実に幸せそうでした。私は、こんなにも愛に満ちた女性達を目の前にして感激したのと同時に、小さなことに一喜一憂している自分自身の日常を思い出し、大変情けなくショックを受けてしまいました。ただ、救いだったのは、ローズマリーの子供達も大学まで進学出来る見込みがあると言っていたことです。もしかしたら、ローズマリーの子供が将来アフリカの貧困を解消してくれるのではないかしら・・・と夢を抱いてしまいました。

お昼になり、ローズマリーの仲間の女性達がランチを作って振る舞ってくれました。スラムで作られた１食約１０円の食事を日本人の私が食べられるのか心配だったのですが、大きなショックの後でお腹が空いていたせいか、とても美味しく

完食してしまいました。「ご飯・お豆の煮物・ケールの煮物・アボガド添え」で、安くて体にも良さそうで、スラムの知恵にびっくりです。この食事が世界中で流行ったら、食糧危機もメタボも軽減するのにな・・・と思いました。

その後、ナイロビにあるメアリー（讃岐さんの友人）のパパ（ＧＥＭ村の実家で我々をもてなしてくれた牧師さん）の家を訪れ、そこでパパの家族や友人と最後の別れを惜しみました。パパが「あの村で５日間のメディカルキャンプが行われたことは、神様が村に与えてくれた奇跡だ！」と言ってくれ、そして、私達が無事に日本に帰り元気で生活することを祈ってくれました。この時、この遠い国にも、お互いに心から思い合える存在が出来たことを実感し、急に地球が小さく感じられました。

その翌日、ついに日本への帰路につきました。我々東京行きの３人はドバイでストップオーバーしたので、ドバイの空港で同行していた方々と別れました。9 日間素晴らしい経験を共有しながら、色々と助けて下さった皆さんとの別れが惜しまれ、何度も手を振ってしまいました。

たった 9 日間でしたが、私の人生の中では実に密度の濃い時間で、アフリカの事・日本の事・・・色々と考えさせられました。東京での日常に流されつつ、今も考え続けています。

「赤道直下の医療ボランティア」

日本医科大学　小児科医師　稲垣　真一郎

①キスム、そしてキシーへ

そこは想像していたサバンナとは似ても似つかぬ、当たり一面、土色の大地であった。首都ナイロビから飛行機で１時間、夕暮れ時に降り立ったキスムの空港には、小さなレストランのようなターミナルがぽつんと寂しく建っていた。そこから、同行のライオンズクラブの方々が寄贈されたマイクロバスに乗ってキシーへ。ビクトリア湖に近いキシーまで約 100km、1 時間位で到着かと思いきや、２時間半もかかるとのこと。意外に安全運転と楽観していた。が、道は全く舗装されておらず、見渡す限りの闇の中にあるのは我々の車

のライトだけ。車内は満席、我々は、手すりを握り、隣の人と肘を触れ合わせながら、激しい山道に揺られながらキシーに到着。移動中から、腰痛と車酔いがあったが、旅は始まったばかり、誰にも言えず我慢した。その後、全員で夕飯をとることに。好物のビーフを注文するも、臭みのある固い肉に戸惑い、完食できず。夜は、生涯初の蚊帳での睡眠。感慨に耽る間もなく、すぐに入眠。

②ジェム村へ

今日から5日間、この旅の主な目的であるジェム村での医療行為だ。期待と不安が交錯する中、バスに1時間揺られ到着。腰痛、吐き気、今度はお尻の痛みも加わったが、村の自然の美しさを見たとたんにそれはどこかへ吹き飛んだ。青々と茂る木々や草、澄んだ空気はとても心地よく、これだけで来て良かったと思えた。村の広場には、すでに数百人の村人が集まっていた。山羊も群れている。のどかな農村の風景そのもの。警戒されるかと思ったが、特に子供たちは遠い国から来た我々に興味を持ってくれているようであった。ナイロビから遠く離れ、電気も通っていない無医村と聞くと、痩せてお腹が突き出た子供たちの周りをハエが飛び回っているところを誰もが想像すると思う。しかし、実際来てみると、そのような子供は見当たらない。幸い、ジェム村の周辺は土壌が豊かで、果物や野菜が豊富に採れるため、飢餓になるというようなことはそれほどないようであった。周りは、果物や野菜の畑だらけである。電気も水道も無い村だが、みんなが力を合わせ、楽しく生活している印象を受けた。

つい先日、同じアフリカ大陸でW杯があったばかり。日本で買ったサッカーボールを転がすと、元気な子供達は、ボールの蹴り合いをすぐ始めていた。

広場にテントを張り、診察開始。医師は、団長の内海先生を含め、内科2人、小児科1人、眼科1人の計4人。いつの間にかテントの前には患者さんの大行列だ。私は専門である小児科を担当。外来は、我々と患者さん、そして現地NPOのケニア人スタッフの方に通訳をしてもらった。大部分は咳、鼻汁や下痢、嘔吐などであった。薬は、NPOの方々に用意して頂いた日本からの薬が一通り揃っていた。診察をしていくと、やはりいくつかの障害があった。まず、言葉の問題である。私の英語力は小学生程度、更に間にスタッフに入ってもらい、その場で母が現地語で子供に症状を聞いたりすると、まさに難易度の高い伝言ゲームである。しかし、現地スタッフの素晴らしい英語力に、大いに助けられた。二つ目の問題は、日本では馴染みの薄い病気が多かった事である。例えば、頭皮の白癬(カビ)感染。頭皮に白癬が感染すると、そこが一部白くなり、脱毛してしまう。これが、ケニアの子供たちに多く見られるのは、洗髪の習慣がないことや、男の子はもちろん女の子も子供のうちは髪を短く刈り上げてしまうこと、が原因であろう。井戸がないため髪を洗うほど水の余裕がない。ヘアースタイルに関しては、村の習慣であるし、短髪が子供たちに似合っているのだから仕方がない。ある時、意を決し、「この子、髪伸ばしたら？」と、お母さんに提案したが、「そんなの子供がしたら変でしょ？」と一蹴された。病気の予防を行うという点で、日本とケニアの文化の違いを感じた出来事であった。他にも、虫歯で殆ど歯が無い子、1週間前に牛に足を踏まれ、怪我したまま普通に生活している子、フィラリア(寄生虫)感染で陰嚢が野球ボール大に腫れてしまっている子なども診察した。(風が吹きつける炎天下、分包機がないという状況で粉薬を調剤するのは、大変だったと思います。薬剤師の石川さんと讃岐さんには、非常に助けていただきました。ありがとうございました。)

③CoCo壱番カレー

ケニア食に慣れたものの、そろそろ和食が恋しくなり、日本から持参した無印良品の乾燥納豆を隠れてつまんでいたある日、昼食はなんとカレーとの噂。自然と、診察のペースも上昇。ついに午前の診察が終わり、我々を待っていたのは、岩崎

さん、石川さん、そしてジェム村の女性陣が共同で作ってくれたカレーである。しかも、野菜などの具は現地調達。匂いが早くも食欲をそそる。私はカレー好きだが、間違いなくジェム村で食べたこのカレーが一番美味しかった。殆どの人がおかわりをしていた。みんなの疲労が少しずつ溜まり始め、お米を食べたくなってきた丁度その時に頂いたカレーは、まさに“愛知県一宮市発”のここ一番(CoCo 壱番)カレーであった。

④一人の女の子

私の心に今も強く残っている患者さんは、2 日目にやって来た。その日の午後も私は、いつものように診察していた。すると、隣で眼科を診察している妻が、「この子、大変！」と子供を抱えてきた。突然の出来事に驚いた私は、訳もわからずその子を手渡された。5 歳くらいのその女の子は、呼吸はしているが、意識は無く、痛みに無反応、体温 40℃なのに手足が冷たかった。細菌が血液に入り込み、全身に回ってしまう敗血症が予想され、早く抗生物質を投与しないと致命的である。内海先生に相談し、キシーにある病院にバスで搬送することに。我々が出来ることは、体を冷やし、脱水を防ぐぐらいしかない。日陰に寝かせ、全身に消毒用アルコールを噴霧、ひたすら紙であおぎ、体温上昇を抑えた。30 分後、キシーへ向かうその車を見送りながら、助かって、とただ願うと同時に、医師としての無力感を感じた。翌朝、村へ行く途中、その子が入院している病院を訪問。古くて暗い病室で昨日と同じように、その子はぐったりと眠っていた。診断は重症型マラリア。迅速に治療すれば助かる病気であり、もしかしたら、と少しの光が見えた。

我々に何か少しでも出来る事はないかと、入院費用を１人数百円ずつ寄付した。このお金で人の命を助けられる、と実感しながら寄付をしたのは、この時が初めてである。数日後、意識が戻ったという連絡を受けた時、私の腰とお尻はまだ痛く、吐き気も残っていたものの、今回、参加できて本当に良かったと感じた。

⑤HIV 感染に関して

今回のボランティアでは、ジェム村にどれだけ HIV が蔓延しているかを調査する事も大きな目的であった(服部さん、お疲れ様でした)。検査の結果、多くの人が HIV に感染していた。改めて事態の深刻さを感じる。今回、小児の採血は人手がかかるという理由から行わなかったが、母子感染を考慮すると、小児感染者もゼロではないであろう。HIV の予防や教育、感染者に対するフォローも不可欠であり、この活動の持つ役割は、今後ますます大きくなるに違いない。

⑥ボランティアに参加して

１週間のボランティアだったが、多くの経験をさせてもらい、ほんの一部しかここに書けないのは残念である。東京から、大阪、ドバイ、ナイロビ、キスム、キシーを経由してジェム村に着くには、最短でも 24 時間かかる。逆に言うと、医療にかかれずに困っている人が、家からたった 24 時間の所に、これだけたくさんいるのかと思うと、もっと世界に目を向けなければと反省してしまう。将来、村に井戸を掘る予定とのお話を伺った。清潔な水が使えれば、予防できる病気もある。治療も大事だが、予防もそれに勝るとも劣らず大切である、と衛生学の講義を思い出す。NPO のスタッフの方々が、今年だけでなく、ジェム村の長期的な将来も考えていらっしゃるという事に感動した。少しずつでもいいから、住民の健康や村の環境が良くなってくれればと願わずにはいられない。

5 日間、みんなで 1000 人超の患者さんを診た。予想以上の重労働であった。が、得たものも予想

以上に多かった。人と触れ合うことの大切さや楽しさを、ジェム村に来て思い出したような気がする。

最後になりますが、いつも優しく、迅速かつ的確な指示をして下さった内海先生、そして私達夫婦をこのボランティに誘ってくれた GSK の石川さんと同僚の近江先生、そしてアサンテ名古屋の皆様、一宮中ライオンズクラブの皆様に出会えた事も、今回のボランティアで得たかけがえの無い財産です。皆様、本当に有り難うございました。

「ケニア」

慶応義塾大学　眼科医師　稲垣絵海

我々がその村につくと、村の女性達の豊かな歌声で迎えられた。力強い歌声の後、青空の下でボランテイアの開会が宣言され、そして医療キャンプが始まったのだった。ナイロビから飛行機で一時間、そしてそこから車で２時間程度か、はるか離れた村での医療キャンプが５日間にわたり繰り広げられた。くりくり頭にくりくりした瞳の子供達は歓声をあげて走り回り、牛はバナナを運び、貧しいながらも風光明媚な美しい村である。その背後におびただしい数のエイズ患者がいることが全く信じられなかった。エイズでの生き死にに直面しつつあるはずの村人は静かに日々の生活を営んでいるようであった。数日前までは日本で眼科医として勤務する日常を思い返すと随分遠いところまできたのが信じられなかった。アフリカでのエイズのボランテイアの話があると夫から聞いたのは４ヶ月前であった。感染者の多い現状を憂いたりすることは日本でも可能だが、人と実際向き合わないとわからない事があるはずだと思い、ひとつ返事で今回のボランテイアに参加する事になった。

ケニア内でエイズが広まっている原因としては複雑な要因がからみあってはいるが、第一に低い教育水準（情報の不足）、第二に社会的背景（男尊女卑、貧困）、第三に医療の人的物的不足等があるようであった。村では教育に関してはエイズに関する正しい知識を NGO のルーネルドの人たちが少しずつ広めようと努力している。まだエイズは祟りであったり、悪魔にもたらされた病気であると考えたり人々も少なくないとのこと。背景に関しては夫に死別された女性（双方ともにエイズの可能性がある）をなんと夫の兄弟が引き取り妻にするという悪しき風習も残っているとのこと。そして医療過疎が深刻である。当然村には医療者も医療施設もない。今回、マラリアの為、重体にあった村の子供を一人キャンプ中に病院へ搬送することがあったがそれもかなり特別な事とのことで、受診する交通手段とお金がないと言うのが一番の理由だそうだ。ここでは子供が亡くなる事も稀ではない。そのためか、今回の医療キャンプには、合計９００人もの村人が押し寄せる事になった。人口 4000 人のゲム村で実に４人に１人が受診したのであった。

医療キャンプでは主には眼の診療を担当した。

日本から眼科の先輩先生から携帯型診察器具を拝借し、さる製薬会社さんより大量の抗菌点眼と軟膏を提供いただいた。さらに百円ショップで老眼鏡と拡大鏡をかいこんで備えた。眼は実に様々な疾患に罹患されていたがここでわたしは三つの事に驚いた。一つはアフリカの人は眼が良いなどの噂は間違いで、３割程度に屈折異常がある様であった。かつ意外と近視も多かった。第二に眼鏡が簡単に手に入らないのだ。ちなみに眼鏡は遠くはなれたナイロビまでいかないとなく、しかも 8000 円ほどするとのことで、多くの村の人にはとうて

い手が届かないのであった。老眼鏡や拡大鏡の適応があった人には差し上げたが、それが噂になりキャンプの後半になるにつれそれら目的の老人がいらっしゃることとなった。第三に失明に至る眼疾患があっても医療機関を受診しない、できないという悲しい現実であった。例えば緑内障、眼球穿孔、寄生虫、過熟白内障そして眼腫瘍など様々な原因で失明あるいは光覚弁に至った人々は皆、今回が初めての眼科医による診察を受けたといった。しかしもう時既に遅しで何も治療しうる状態でない方が多い事は無念であった。村での診察は受診希望者が殺到し最終日は強制終了を余儀なくされたのは少し残念であった。どんなに薬を用意しても、追加購入してもすぐ底をつくのであった。

今回の医療キャンプは毎年ケニアを訪れていたアサンテナゴヤと現地の NGO、そしてスラムでのボランテイアに携わる讃岐さんの構築された信頼関係の上で成り立っていた。

“今回我々とあなた方がなし得た事は奇跡である。様々に問題があってもこれから前に進んでいくために少しずつ解決していこう”と現地の NGO の関係者（メアリーの父）が最終日にこう言っていた。こんな言葉をかけてもらえるのは素晴らしいと感じた。今回の医療活動をささえたのはアサンテナゴヤの石川さん、岩崎さんの尽力や細やかな気配りによるものも多かったと思う。医師団としては指揮官の内海先生、内科の近江先生、薬剤師さんとして GSK 石川さん、讃岐さん、採血の検体をとってくださった服部さん、そしてご寄付をいただいた一宮ライオンズクラブの方々、そして会場の設営や通訳、運営をした NGO ルーネルドの方々にこの場をおかりして感謝申し上げたい。微力ながらこの試みに今回関わる事ができた事を非常に光栄に思う。またケニアで村の人の笑顔を見たいと思う。来年は水も電気もない村に水道をひく計画があるとのこと、非常に楽しみである。

「目の当たりのケニア 」

グラクソ・スミスクライン（株）石川博司（薬剤師）

ナイロビで国内線に乗り換えキスムに降り立つころには、もう日が暮れていた。夕暮れに空から見たキスム空港は、ただ一本の滑走路が見えるだけで他に何もない。我々の乗った飛行機は夕闇の一筋の光に向けてやや乱暴に着陸し、そしてエンジンが停止した。少し不安を覚えタラップを降りると、赤道直下の地とは思えないほどに涼しく、そして、およそ空港とは思えないほどに静かで、真っ暗な場所だった。未だかつて体験したことのない世界へ来たのだと実感した。これが私の初めてのケニアの印象だった。

空港で現地の NPO と合流してキシーの町へ向かった。夜のケニアの国道には街灯ひとつなく、ただ暗闇を照らす車のライトが荒れたアスファルトの道をかすかに示すのみであった。約 3 時間、時折すれ違う車以外にはただ真っ暗な道を走っていくのであるが、道端をたくさんの人々が歩いているのを目にした。人々は暗闇をごく普通のこととして感じているのであろう、大きな荷物を頭に載せている女性、子供、自転車に乗る若者など、そこかしこ、まるで日中の様に人々が歩いていることに不思議な感覚を覚えた。キシーの街につくと、もう夜も遅いのに活気というか、何やら危険な香りのする異様な雰囲気に圧倒された。それから食事をとり、翌日の仕事に備え眠りに就いた。

朝、目覚めると、そこはかつて映画で見たようなアフリカの町だった。街角を行き交う人々

の喧騒と、まぶしい日の光が注ぐ埃っぽい街。路上には荷物を積んだトラック、道端でなにやらカラフルな物を売っている人たち、けたたましい音を発しながら走るバイク。ようやく自分がケニアにいることが自覚できた瞬間であった。

しばらくして、我々は今回の医療支援の目的であるイーストジェム村へ向かった。キシーの街から一時間半、これまた経験したことがないほどの悪路を進んだ。

しかし、車の中から見える景色は雄大で、見渡す限りの緑の森と赤い土、そして青い空が続いていく。未開の土地ではなく、人々が生活している土地で、これほど人工物のない景色は目にしたことが無い。ただ、至る所で作物が実り、道端で草をはむ家畜の牛やヤギを見かけるのを考えると、確かにこれ以上なにも必要のない豊かさが感じられる。私たち日本人もほんの 100 年ほど前まではこんな生活をしていたのだろうと思う。都市部はともかくとしても、田舎に行けば電気などなかったであろうし、上水道、下水道、は言うに及ばず、医療アクセスもほとんど無かったであろうと想像できる。それに比べれば、このケニアの地のなんと豊かなことか！土地と自然の豊かさは人間が生きていくのに、いかに大切か考えさせられる。

イーストジェム村へ到着すると、村人が歓迎の踊りで迎えてくれた。来客を歓迎するのに多くの人々が集まり、踊りや歌でもてなす。やはり、今の日本で生活をしていると、体験のできない感動がそこにあった。確かに豪華な食事やおいしい飲み物は期待できないが、今迄訪れたどんな土地や場所でもこんな出迎えを受けることはなかった。村人は「医者」が来てくれて本当にうれしい。だから、精一杯の歌や踊りで出迎えたい。という思いが伝わってきた。(私は医師ではないが・・・)

診療の準備が整うと、一斉にさらに多くの人々が集まってきた。受付、診療、薬局は大わらわだ。炎天下にもかかわらず、村人は長い列をなして診療を待っている。診療を受ける人々の中には、明らかに病のなさそうな人も含まれるが、時には目を覆わんばかりの重症者もいた。私（薬局）のところに最初に訪れた患者さんは、高齢の女性で牛の角で手に重傷を負っていた。医師も縫合キットを持ってきていなかったので、処置のしようがなく、私のところへ「とりあえず洗浄と消毒＋鎮痛剤と抗生剤の投与」という指示で廻ってきた。恐るおそる、ミネラルウオーターで傷口を洗い、イソジンで消毒をし、その場で薬を飲ませた。とても痛々しい状態で、本人も苦痛に顔を歪めていたが、それ以上私にはどうすることもできなかった。後になって、あの人にはもっとできる事があったのではないかと後悔するが、次々に押し寄せる患者の波に圧倒され、仕事に忙殺されることになる。この状態が 5 日間続いた。最後は薬という薬が品切れを起こし、診療不能という事態に陥ってしまった。その間、瀕死の状態の子供を病院に運び救命することができた。後で聞けば重症のマラリアであったという。たとえ一人でも子供の命が救えたことは、私にとっては感動的であった。

途中いろいろとトラブルがあったが、医療チームの見事な連携で、何とか無事に無料診療ボランティアは終了した。今回の医療支援には大きな目的として、イーストジェム村の現状を把握するということを掲げていたので、たくさんの村人の健康状態を把握するという目的は叶ったと思う。同時に行った HIV 抗体検査でも大きな収穫があった。診療患者 1200 名、抗体検査 201 例。驚くべきことに HIV 陽性率は 22%を超えていた。実に家族に一人は HIV 感染しているような状態である。またその為によ

るものなのか、何らかの感染症状、皮膚疾患にかかっている人、歯に問題を抱えている人を多く見かけた。この現状を鑑みるに、来年以降の支援の在り方について、多くを学ぶことができた。私が感じた最大の問題点は公衆衛生に関することであった。清潔な水と清潔な習慣を伝え、感染症（結核や HIV）の予防方法について教育する機会が必要と感じた。

5 日間のイーストジェム村での滞在で心に残ったことがある。それは、「子供たちの元気で明るい姿」であった。みんな楽しそうに遊び、学校では一生懸命勉強をしている。ここには「楽しい、うれしい」という気持ちがあふれていた。この子供たちの姿を見ると、この子達の為に何かしてあげたい。何か役に立ちたいと思えてくる。何よりもこの子供たちが大きくなるころには、この村をもっといい村にしたいと思った。そのために自分に何ができるかを考え始めている。

あぁ、自分にこんな感情があるのだと、ある意味驚いたが、この思いを抱くことに清々しさも覚えた。ケニアに来て最大の収穫であった。

おそらく来年もこの地を訪れることになりそうだ。来年まで子供たちの健康を祈らずにはいられない。また逢う日まで。

「ケニア Gem 村での新たな経験と出会い」

リサーチレジデント　名古屋医療センター　服部純子

今回 9 月 16 日から 26 日までの約 10 日間のケニア行きに名乗りを上げたのは単純、且つ不純な動機からでした。

『野良キリンをこの目で見たい！』

内海先生とそれまでアフリカへの旅を共にされていた亡き森下高行先生からたくさんの写真を見せていただいたことがあり、写真では伝わらないであろうアフリカの壮大さや広大な自然の中で生きる野生の動物の姿を自分の目で見てみたくなったのです。

内海先生と直接お会いする機会があった際にケニアへの同行をお願いしてみたところ、すぐに承諾していただき、夢が現実になるという実感が徐々にわいてきました。

無料診療：

Kisii のホテルから大きなバンに乗り込み、舗装されていない土の道を揺られながら、これまで見たことがないような、でもどこか懐かしさを感じさせるような景色を楽しみました。約 1 時間半後、とうとう Gem 村に到着した時にはもう既に何十人という人々が待ち構えていて元気な踊りと歌で歓迎してくださり、車酔いでダウンしかかっていた私も元気をもらいました。

いざ診療が始まると集まっていた人々が我先にと凄い勢いで長い行列を作りました。事前に内海先生から HIV 検査希望者について採血をし、スクリーニング検査を施行するよう言われていましたので早速採血の準備をしました。準備が終わっても診療開始後しばらくは HIV 検査の希望者がほとんどいなかったので、のんびりと診療の様子や診療に集まった人々の様子を観察しておりました。すごいなぁと感じたのは、少しの打ち合わせをしただけで、あとは自分のすべきことを自ずと見つけて自主的に動く先生方や針灸師の石川さん、薬剤師として働かれていた讃岐さんや GSK の石川さん、それから Mary さんや Mary さんのお父さん（パパ）を始めとする現地の CBO の方々、また全ての潤滑油的存在であり中心的存在である岩崎さん。各々が歯車のように上手くかみ合って一つの

物を動かすために頑張っていました。逆に言うと、誰が欠けても今回の診療は成り立たなかったのではないかと思います。

午前 11 時頃に始まった診療も徐々に忙しさを増し、私も次々と採血を終わらせなければちょっとした行列ができてしまう程になりました。ふと時計に目をやると既に午後 3 時半を回っていました。それでもまだまだたくさんの方が診療を求めて列を作っていたのですから、どんなに大勢の村人が医者の診療と薬を心待ちにしていたのかと改めて感じました。

夕方になりその日の診療は終了と言われると、それまでずっと炎天下の中、並んで順番待ちをしていた方々の中には「自分は遠くから何時間もかけて来たから、今日見て欲しい」と必死に訴え始める方もいらっしゃいました。内海先生を初めとしてどの方も「もう 1 人だけ」といつまでも診ていました。それでも全員を診ることはできないので、「また明日来てください」と伝えてその日の診療を終えることができました。しかしそれが通用するのは初日から 3 日目まで。最終日には、「明日は診療が無い」といつまでもカルテ代わりにしていた用紙をスタッフに突きつけてきました。するとスタッフの誰もが 1 人でも多くの人を診てあげたい、薬をあげたいと一心不乱に働いていました。そういった様子は、映画「シンドラーのリスト」を彷彿とさせるものでした。診る方も診られる方も「この機会を逃したら…」と必死で、私はとても胸を打たれましたし、医師ではなくただ見ていることしかできない自分の無力さに苛立ちすら覚えました。

採血と HIV 検査：

採血係を指示された私は、これまでに経験したことの無い程たくさんの人から採血をしました。多くの方は健康的でしっかりとした血管の持ち主でしたので心配したほどの苦労はありませんでした。ただ驚いたのは、エタノール綿で針を刺す箇所を拭った時です。拭った後のエタノール綿を見ると真っ黒になっていました。いかに衛生管理ができていないかを物語っていたと思います。「蛇口を捻れば水が出る」とか「汚れたら石鹸で洗う」などという私達からしたら当たり前のような環境が、この地では当たり前ではないのだと気付かされました。水は雨水を貯めて使うそうです。実際にパパとお話しした時に、「この村には井戸代わりの『穴』はあるけど、内壁がしっかりと舗装されているわけではない上、蓋も無いので、雨が降ると雨水が貯まってしまうし水には虫や土が混じっている。」と村に必要な物はちゃんとした井戸だと仰ってました。アフリカで井戸を掘るというお話しは青年海外協力隊などでよく聞くと思いますが、命の源であると言っても過言でない水を確保するのに確かに井戸は必須だと感じました。

さて、無料診療が終わると今度は HIV 検査です。診療中に採血した血液はホテルに持って帰り、ホテルの部屋で HIV 検査を行うことになりました。検査には血液中の血清という成分を用います。通常は遠心機という機械を使い、血液の入ったチューブを高速回転させることで血清をその他の血液成分から分離するのですが、そういった機械が無いため別の方法で分離する必要がありました。別の方法といっても、単純に血液を試験管立てに立てて放置しておくだけです。方法は単純なのですが、一旦血液成分が分離したら、その後は採血管を揺らしたり落としたりして混ざることは避けたいので、車での移動中はずっと試験管立てを誰かが持っていなければいけないと

いう欠点があります。その役目を買って出てくださったのがGSKの石川さんでした。前述の通り、Kisii－Gem 村間は舗装されていない道がほとんどです。石川さんは採血管を揺らさないようにするために助手席に座り、車の揺れに合わせて試験管立てを浮かせたりするなどかなり慎重に運んでくださいました。

夕食後に HIV 検査を開始しました。HIV に感染しているかを決定するには2種類の方法を使います。今回は、まず 15 分で判定できるキットを使い、それで陽性と出た血漿について 2 つ目の方法を用いて陽性か擬陽性だったのかを確認します。血液の運搬だけでなく、真夜中にも関わらず検査の方でも GSK の石川さんがお手伝いを名乗り出てくださいましたので、スムーズに検査を完了させることができました。

初日は、31 名の内 9 名が HIV 陽性だと判明しました。アフリカで HIV 感染者数が多いことは仕事柄十分承知していましたが、現実に自分が姿を見、自分の手で採血した血液の 3 つに 1 つが HIV に感染しているということを目の当たりにし、陽性者の頻度の高さに愕然としました。それと同時に、今日 1 日私は素手で採血をしていたことに不安を覚えました。そして考えさせられました。『自分の命を張って、この村の人に奉仕する必要があるのだろうか？』

次の日から採血の際は少し慎重になりゴム手袋をするようにしました。ただしこれまでに経験してきた日本人や欧米人とは違って肌の色が濃いため、一見して血管の位置を確認することが少々困難でしたので、ゴム手袋は早々に外さざるを得なかったです。使用後の針は必ず廃棄用の缶の中に入っていることを確認し、無理に押し込まず、次に蓋を開けた時に針が飛び出ないよう気をつけました。特に気を使ったのは、廃棄用の缶のすぐ近くで子供が数人座っておしゃべりをしたりうたた寝をしたり、無邪気に遊んでいた時でした。どの子も決して人の物を勝手に触ったり、いたずらをしない良い子達だったので少し安心して仕事に集中できました。

4 日間の無料診療中に合わせて 200 数名、1 日平均 50 名もの方から採血をしました。それまでこんなに多くの方から採血をする経験はありませんでしたので、自分でも驚く程上達したと自負してます。今回 HIV 検査を実施した結果、22.7%が陽性。実に 4～5 名に 1 名が HIV に感染しているということがわかりました。ちなみに日本はというと、2009 年の時点での人口が 1 億 2,756 万人、HIV 陽性者数が約 16,000 ですので、HIV 陽性者は 1 万人に 1 人の割合（0.01%）ですので、Gem 村での状況の壮絶さがお分かりいただけるでしょうか。

最後に：

今回の旅では予想以上にたくさんの事を経験させていただいたと思います。帰国の日、空港に向かうマイクロバスの中で色々な事を考えていました。今回行った無料診療でどれ程の方々が喜んでくださったのか。日本での生活がいかに恵まれたものなのか。日本と比べて不便な環境にあっても、現在置かれた環境の中で一生懸命、前向きに明るく生活している村人の明るい笑顔。

今回の旅に参加できて、経験値が上がったような充実した気持ちに浸っていました。唯一思い残すことと言えば、野良キリンなど野生動物を見ていないということでした。しかし、空港に到着する間際、丁度私も疲労からかウトウトとしていた時、どなたかが「キリン！」と叫んだのです。窓の外を見ると、何頭ものキリンがタカタカと走っているところを目

撃することができました。夢が叶った瞬間です。とても感動的でした。

内海先生、石川さん、岩崎さん：

今回全く私の不注意で、名古屋から関西国際空港に行くまでの間に愛用していた iPhone を失くしてしまいました。空港に着いた直後に気が付き、岩崎さんがとても心配して空港中を一緒に探してくださいましたが見つかりませんでした。実のところ携帯電話を失くしたことは私にとってかなりショックでとても落ち込んでいたのですが、ケニア滞在中は忙しさなどですっかり忘れていました。ただ、日本に向かう飛行機の乗り継ぎ便を待っている時、内海先生が『アフリカに行かなければ失くさなかったかと思うと大変申し訳ない』と新しく携帯電話を購入するのに当ててもらえればと寄付をお申し出くださいました。もちろんお断りしましたが、内海先生の人を思いやる気持ちの深さを改めて感じました。こんなに素晴らしい方と 10 日間という短い間でも一緒にお仕事ができたことは大変貴重な経験であったと思います。ありがとうございました。

アフリカ支援に一生懸命取り組んでいらっしゃるアサンテ　ナゴヤ理事長の石川さん、そして事務の岩崎さんには本当にお世話になりました。お 2 人無くして今回の活動は成功しなかったと思います。ありがとうございました。

「５０周年記念事業　ケニア医療検診車贈呈奉仕活動」

一宮中ライオンズクラブ 50 代会長　深川　善治

私共、一宮中ライオンズクラブは、今年結成 50 周年を迎えその記念事業として、アメリカシカゴにある国際協会本部にＬＣＩＦ資金を交付申請しアサンテナゴヤ様を通じて、アフリカ・ゲムイースト村に医療施設や診療所で治療を受ける為の検診車を寄贈する計画をしました。

寄贈する検診車は、日本で調達し、車の仕様については、アサンテの石川様・岩崎様の指示を頂き、今年 2 月に、日本からケニアへ車を輸出しました。車種はトヨタハイエース・ワゴン車・ディーゼルエンジン・5 速フロアーチェンジミッション車を、サファリ使用に改造・ショックアブソーバーの交換・ロールバー取り付ボディーの強化・バンパーの取り付・車の底にエンジンを守る為の鉄板の取り付・アフリカのゲムイースト村の悪路を走行出来る様になるには、現地での改造する手間もかかりました。

9 月 11 日・一宮市民会館（定員 1588 名）の会場において、ＨＩＶ/エイズチャリティー『田原総一朗氏講演会』で内海先生に、観客動員数 1,300 人の皆様の前で、アフリカでのアサンテナゴヤの医療奉仕活動の内容と経緯、ゲムイースト村の現状を説明していただき、ロビーにて写真・パネルを展示しました。また、ＨＩＶ/エイズチャリティーを行い、今後の活動資金として募金　169,449 円と、ケニアにおける支援活動に使って頂く為の『検診車』寄贈の目録を内海先生へお渡し出来ました。

アフリカには、ケニアとタンザニア・ウガンダの国境にまたがってビクトリア湖があります。面積は、68,800Ｋ㎡で実に琵琶湖の 100 倍以上の大きさで、その湖の南西にキシという町があり、そこから車で 1 時間程の所にゲムイースト村があります。

私達の今回のケニアでの目的は『検診車をゲムイースト村へ届ける事』『注文通り納車出来ているか確認する事』のこの 2 点でした。ライオンズクラブからの参加メンバー前会長の御子息の佐

野考宏さんと私と私の友人上田夫妻　合計４名です。9 月 17 日の夜キスム空港に到着し、寄贈車でキシへ移動、翌日の朝ゲムイースト村へ到着しますと、村の人々が我々を歌と踊りで迎えてくれました。メリーさんのお父さん（牧師さん）が贈呈式典セレモニーの司会をしてくれ、その来賓に政府の職員が出席し、祝辞と感謝の挨拶を頂きました。

式典終了後、ゲム村の人が作った青・緑・黄三色ケーキをみんなで食べ、アサンテナゴヤ・ゲムイースト村・ライオンズクラブの思いを一つに出来ました。9 月 18 日から、ゲム村での医療奉仕活動は、毎日 200 人以上、5 日間合計 1000 人以上の患者さんを診察されながら、ＨＩＶ／エイズ抗体検査の陽性感染のリサーチを、医療関係者アサンテナゴヤ様の方々で実施されて、注射針を使っての作業は、危険が伴い命がけの奉仕活動であることが我々ライオンズメンバーからもよく解ります。

ジャンボサナ　ケニアの言語スワヒリ語）で『こんにちは』という意味です。ゲム村の子供や、すれ違う村人に『ジャンボ』と言って挨拶をすると、必ず喜んで返事を返してくれます。ゲム村にはたくさんの子供がいます。2 才から 4 才くらいの子供を 8 才くらいのお兄さんやお姉さんが、背負って子守をし、ゲム村コミュニティ全員で助け合いをします。そして、子供達が遊び廻りますが、規律正しくじっと我慢する姿は日本と同じで可愛く思います。

讃岐さんのコロゴッチョスラムに訪問し、昼食を頂きありがとうございました。稲垣医師ご夫妻・近江先生は若くて、美男・美女でスタイルもスリムですが、昼食のライス豆のアボガドを乗せて大盛の食事をペロリと完食されました。正直自分自身で、食べあぐんでいると、女医の近江先生が、『アボガドを食べられないのなら、私に下さい。』と言われ、食されました。

スラム街の悪環境の中でも、医療チームのバイタリティと迫力が伝わってきました。讃岐さんのケニアでのスラムにおける自立支援活動は、誰もがやれる事ではありません。今後ライオンズクラブで、出来る事が有れば、御協力させていただきたいです。今回ケニア 10 日間ありがとうございました。

「ケニアの旅に同行して」

一宮市・自営業　　佐野　考宏

はじめまして　こんにちは　佐野と申します。愛知県一宮市で家業を継ぎ、お好み焼き　みたらしだんご　焼きそば　たこ焼き　鯛焼きを売るお店をやっております。普通？の４２歳の男です。今回２０１０年秋にアサンテナゴヤのみなさん、東京の医師のみなさん、一宮中ライオンズクラブの方々とアフリカ　ケニアの旅に同行させていただきまして、見た事・気づいた事・感想なんかを書かせていただきます。

父がライオンズということで、アサンテさん、ライオンズの協力のもと、ケニアのゲムイースト村に贈られましたハイエース（車）を見に、写真やビデオ撮影に、また医療活動をされます医師のみなさんの荷物運びやら、何かお手伝いができればと思い、出発いたしました。

私自身何の肩書きも資格もないごく普通のおじさんですが、年頃の娘もいて、ＨＩＶですとかエイズ・貧困問題・格差社会などいろんな想いをもって現地に赴きました。

着いた時は夜で辺りは暗く、電気ではなくあちこちで油が燃やされていて、土ぼこりとにおいを感じました。宿泊の宿のまわりはレゲーの音楽が

大音量で夜中じゅう流れていて、食事にいった所もクラブというか、ディスコみたいなのが隣接していてすこし怖かったです。でも、どこの国も若者は一緒なんだなと思いました。

食事はチキン　フィッシュ　ビーフが選べてビーフを頼んだのですが、細かく刻んであり多少硬く、食べれない方もいらっしゃいましたが、なんとかいただきました。翌朝には、静かなお祈りのような音楽が流れていて、朝食はスパニッシュオムレツを食べましたが、こちらは卵の黄身が白っぽいらしく　黄色くはないオムレツでした。ヴィクトリア湖近くということもあり、淡水魚をから揚げにしたものを夜にいただきましたが、おいしかったです。こちらの料理は自分の口には合うようでした。

宿泊の町キシーから車でゲムイースト村へ。お医者さんが来てくれるということで、たくさんの人が集まっていました。歌と踊りで歓迎され、広っぱにテントを二つ張リ仮設診療所の完成。木陰にイスとテーブルの受け付けと薬局も。

みんなで円になって式典や車の贈呈式（感謝の言葉をいただきました）歓迎のケーキも用意されていて、村のみんなでつまんで分け合いました。小さな女の子が背中におんぶした子に分け与えてたのが微笑ましかったです。

さっそく診療開始。最初の患者さんは、牛かやぎの角で手をばっくり怪我した人。外科の先生はいませんので、消毒してお薬を渡すのみでした。内海先生をはじめ、内科　眼科　小児科　血液の先生でスタート。今回は血液検査もするそうで、ホテルに持ち帰ってからも夜遅くまで調べられていました。

二日目には高熱を出し、危険な状態の子供が運ばれてきました。ハイエースに乗せられ街の病院へ。　その子の親には病院に診せるお金がないというのです。でも放っておいたら死んでしまうとみなで少しですがカンパして行くことになりました。たまたま、先生方がいらした時でよかったですが、もしも、何もない時だったらどうなんでしょう？お医者さんのいない村、お金のない貧しい人々、街へも連れて行けない。死を待つのを受け入れるしかないのでしょうか。そんな覚悟で暮らしているんでしょうか。ふと考えてしまいました。

ＨＩＶの感染率の高い地域ということもうかがいました。理由としては専門家でないので、いちがいに言えませんが、聞いたところによると、一夫多妻制であったり、情報がなく知識がないとか、わけのわからない病気にかかってしまい村八分にされたり、家族からも離れて暮らさなきゃならなかったり　悲しいことです。

しかし医療関係の人間でないわたくしはちびっこたちと縄跳びしたりボールで遊んだりもしました。大きな子も小さな子も男の子も女の子も、中にはボールをポケットにいれてしまって独り占めしようとする子もいたりして、言葉は通じませんが楽しかったです。村の奥様方には共同調理場なのか？売るためなのか？やきいもとチャイ（あまいミルクティー）を頂きました。おいしかったです。穴を掘って石で囲んで木を燃やすだけの、屋根もない調理場です。キャンプみたいでした。差し入れでいただいたバナナも日本で食べるものとはけた違いうまかったです。あまりよくない行動ですが、村の若者に借りたオートバイにも乗っちゃいました。アフリカの大地でバイクに乗れたのはいい思い出です（ゆっくりですよ）。

村の様子は気候も穏やかでからっとしていて、土も肥えてるのか、野菜やくだものもあり、食べるものにはそんなに困るようではなさそうでした。家畜もいたので動物タンパクも摂れそうです。ただそういったものを街へ売りに行ったりしてお金に換えるてだてがないのでしょうか？必要ないのかな？商売人の悪いくせですね・・・。でも多少のお金があれば、いざという時病院にも行

けたり診てもらったりできると思うのですが。

井戸がありました。ただ掘っただけの屋根もないもので、不衛生で、内海先生もちゃんとした井戸があれば衛生的な水が確保でき、健康面でもいいのにとおっしゃられてました。

自分たちは三日目には先生たちとはいったん別行動になります。ナイロビに戻り、ナイバシャ湖畔のチュイロッヂというリゾート地へ。サファリライドといって四駆の屋根の開く車で動物たちをゆっくり見て回るのです。湖をボートで散策したり、ウォーキングしたり。そしてもう一箇所、ケニア山の見える国定公園内にあるテントサイトへ。こちらではアフリカでも人間による乱獲によって数が減っているチンパンジーや傷ついたサイなどが保護されてました。ケニアに住む日本人ガイドの方が、最近日本の新婚旅行いってみたいランキングで、ケニアが３位になったとうかがいました。アフリカというと、一生のうちでも日本からだとなかなか来られるものではないと思うので、こういったケニアの大自然や動物達も大切に残されて観光という面でも、アフリカに目が向けられることはよいのではないかと思いました。

ゲムイースト村での医療活動を終えられた先生方と合流し、コロゴッチョというスラムにも行きました。ＨＩＶに感染している女性のお話をうかがいました。ごはんとお豆の煮込んだのと青野菜・アボガドのワンプレート大盛り、うっすら塩味でおなかいっぱいいただきました。

ここでも先生方による診療がおこなわれました。スラムでもＨＩＶ・エイズの問題や貧困など考えさせられる問題がありました。

最終日にはライオンズアイクリニックにみなさんで訪問し、血液検査などで出た医療廃棄物の処理をお願いしたり、病院を見学させていただき、ケニア　ナイロビを後にしたのです。

自分のまとめの感想ですが、この旅　アフリカケニアのいろんなところを見て聞いて感じて触れて食べてとてもよかったということです。こんな簡単な感想ですみません。食べ物の仕事をしてるので　食べ物は気になりました。どこでもおいしかったです。太りました。

難しい問題はありますが、目をそむけるのではなく、その事も含めてケニアのいいところも自分としては紹介したいなとおもい、書かせて頂きました。

ほんとにいいところでした。どんな入り口でもかまわないと思います。行ってみたいな　何か協力できないかな　みたいな気持ちを持ちつつ、普段の自分の暮らしや身近な人も大切にできたらいいのでは？と思いました。

「ケニアでの医療並びに自立支援活動」

東名古屋病院　内海　眞

2000 年夏から、我々は日米の医療者とともにケニアの首都ナイロビにあるスラム・プムワニ村で無料医療活動と HIV 検査並びに HIV 陽性者に対する相談事業を行ってきたが、昨年からはケニアの奥地にある Gem 村とナイロビにあるコロゴッチョスラムに対する支援活動へと路線を転換した。プムワニの支援は従来のグループが継続し、我々は新しいニーズに応えるべく新たな態勢を組んだわけである。この新しいニーズを提示して下さったのは、名古屋在住の薬剤師である讃岐珠緒さんである。彼女なしでは新たなプロジェクトを始めることはなかったし、ケニアの人々との素

晴らしい出会いもなかったわけである。さらに、彼女なしでは今後の支援活動もうまく運ばないであろう。彼女こそ、我々と現地の人々を結ぶキーパーソンである。確かに Gem 村はナイロビから遠く、そこに行くだけでも大変であり、またコロゴッチョスラムはナイロビの中でも最も危険なスラムであり、そうした意味では我々の活動は困難の度合いを高めたわけだが、それに勝る価値を我々はケニアの人々との交流の中で学ぶことができた、と言うことができる。

昨年 4 月には調査旅行を企画し、本年 9 月には実際の医療活動を Gem 村で開始するとともに、コロゴッチョスラムでは現地の NGO とより親密な交流を形作ることができた。

以下に本年 9 月のケニアでの活動を記述するとともに、活動に対する私自身の感想と将来への展望を書き加えたいと思う。

9 月 16 日木曜日、私は東名古屋病院の勤務を終え、夕刻 37kg あるバッグを抱えて関西空港に向かった。バッグの中身は、薬剤、シップ、検査キット、カルテ、など診療に必要なものが大半で、私自身のものはわずかだった。既に空港に到着していたアサンテナゴヤ並びに一宮-中ライオンズクラブのメンバー7 名と 9 時過ぎに合流し、私の荷物を他の人のバッグに分散後、11 時 15 分発ドバイ行きのエミレーツ航空の飛行機に乗り込んだ。ドバイでの乗り換えの際、東京から来たボランティア 4 名と合流した。4 名のうち 2 名は私にとっても初対面の医師であった。ナイロビについたのは翌日午後の 3 時頃で、入国手続きを経てケニアの国内線に乗り換え、ヴィクトリア河畔にあるケニア第 3 の都市キスムに向かった。キスム空港はビルディングもなく 2 階建の小さなオフィスがあるだけの、小さな空港であった。既にアフリカ入りしていた讃岐さんと現地 NGO の代表者が我々を迎えに来てくれており、1 年半ぶりの再会を喜び合った。一宮-中ライオンズクラブの支援であらかじめ送られてあったトヨタハイエースとタクシーに乗り込んで、キスムから車で 2 時間半の町キシイに向かった。キシイに到着したのは夜の 11 時で、遅がけの夕食をとり、ベッドに入り込んだのは 1 時ころであったと思う。日本とケニアの時差は 6 時間であるので、病院を出てから約 37 時間後にベッドに就いた計算になる。長い旅であった。我々のホテルは円換算一泊 500 円ちょっとのホテルで、私に取ってはお値打ちと感じられたが、初めてのアフリカ訪問組の人たちにとっては、何とも不安なホテルであったようである。ホテルの 1 階にあるバーは明け方まで大音量の音楽を流し続けていたため、第一日目は睡眠不足であったが、人間は次第に順応するもので、翌日からは少しずつ眠れるようになっていった。

翌日から 5 日間、車で約 1 時間の距離にある Gem 村に通った。無料診療は村の広場で行われた。初日は地方政府の役人も来ており、我々と住民の前で挨拶をされた。住民の健康維持と感染症の予防にはクリーンな飲料水が必要である、と話されていたのが印象に残っている。日本から運んだ小さなテントを二つ張り、その間を屋根状に布を張ってちょっとした日陰の空間をつくり、内科、小児科、眼科の診療と HIV 検査に必要な採血のスペースを確保した。受付と薬局はやや大きめの木の陰に設営したが、太陽が移動するとともに木陰も移り変わるので、直射日光を避けるためには薬局と受付は時々その位置をずらさねばならなかった。Gem 村は高地にあるために、ほぼ赤道直下に位置するにもかかわらず気温は快適であったが、日中の直射日光はやはり

強く、薬局を担当した人の首筋や耳介の後ろは日焼けによって軽いやけど状態になっていた。しかし、そこはさすがに薬剤師、持参のステロイド軟膏を使用してやけどを軽傷に止めていた。

5 日間で約 1000 名の患者さんの診療を行うことができた。ナイロビのスラム・プムワニ村では気管支炎をはじめとする呼吸器系の疾患が多かったが、Gem 村では空気が良いせいか呼吸器系疾患は少なく、頭痛、頚部痛、腰痛を訴える人々が多かった。多くの子供達も受診したが、東京から来た小児科の先生が大活躍されたお陰で、内科医の私の負担は軽減された。ここでの医療には大きな限界がある。検査も十分できないし、それ以前に十分な時間をかけて問診を行うことができない。患者さんの数が多いからである。また、治療も対症療法になってしまうし、フォローもできない。こんなやり方でいいのだろうかと、いつも自問する。しかし、やむを得ない。ただし、少しずつ改善していく努力だけは続けていきたいと思う。いつかオフィスを提供することができれば、事態は大きく改善されるだろう。ＨＩＶ検査には 200 人を超える人たちが応じてくれたが、陽性率は 20%を超えていた。特に初日のＨＩＶ検査の陽性率が 30%近かったのには、我々のみならず現地ＮＧＯのメンバーも驚愕に似た思いを抱いたはずである。Gem 村での HIV 陽性率のデータは初めて出されたものであり、今回のデータはこれまでの予想を超えていた。このまま何もせず、事態を放置しておいては村の存続にもかかわるとの思いが、我々の間にもまた現地の人々の間にも共有されたと思う。

今後の HIV 予防活動をどのように実施していくか。我々としては現地の人々の要請に従って、我々にできることを実行していこうと思う。こちらが対策を考えるのではなく、彼らの考えを尊重していきたい。我々は彼らの文化や宗教を熟知していない。彼らの生活習慣や伝統も知らない。彼らの心の奥底にある哀しみや希望についても想像するだけである。彼らに仕える形で今後の協働事業を進めていきたいと強く考えている。もちろん、提案はしていこう。しかし、最終的な方針決定は彼らに委ねるべきであろう。

Gem 村での最終日、現地 NGO のスタッフとともにディスカッションを行った。彼らは医療施設の建設を強く要望されたが、それは我々の力を超えている。近未来にそれを実現することは不可能であることを申し上げた。我々にできることは、クリーンな飲料水を提供できる井戸の掘削、HIV 関連情報の提供、HIV 検査、無料医療活動、の 4 点であることを伝えた。少し時間をいただければ、オフィスの建設も可能かもしれないことは、メールでも伝えた。彼らも上記諸点については異存がないようである。現地 NGO もこれまで以上の HIV 予防活動と HIV 陽性者の支援を行うことを宣言した。具体的には、今年の 12 月 1 日の世界エイズデーに Gem 村で HIV 予防と陽性者支援のイベントを開催することが決まった。Gem 村出身者でナイロビ在住の有志の支援もある。Gem 村における HIV 対策の第一歩になると期待される。

井戸の掘削については、ケニアで井戸造りをしている日本人と出会う予定にしている。ケニアに向かう前に彼と連絡がつき、井戸造りが現実味を帯びてきた。これからも乗り越えなければならない壁はあると思われるが、なんとか実現にこぎつけたいと思う。地方政府の役人が話されたように、Gem 村にはクリーンな水が是が非でも必要である。現在の井戸は浅く、周りを囲う壁や屋根もなく、地平面からいきなり掘られた格好になっている。人々は綱のついたバケツで水をくみ上げるが、

多くの場合水は肉眼で見ても混濁している。雨の時は周りの水が流れ込み、乾期には水が濃縮され、時には有害物質濃度が高まる。稀に子供が遊んでいる時に井戸に落ちてしまうという。これでは生活の基礎のクリーンな水どころではない。やはりきちんと周りを囲われた深い井戸の掘削が必要である。もちろんポンプ式で屋根も付けなければならないだろう。

Gem 村の NGO のメンバーやその活動を支える人々の幾人かとは、かなり親密になることができた。毎日一緒に活動し、夜も同じホテルで泊まり食事を共にした 30 代のメンバーであるメアリーとダグラスの 2 人、Gem 村出身でナイロビの教会で活躍している村の長老格の 50 代の牧師さんとその息子、1 週間以上仕事を休んでまで我々の車を運転してくれた牧師さんの親友であるウイリアム、どの人も素晴らしい人々であった。彼らの家族が HIV 陽性であった方もいる。彼らは心の底から HIV 感染予防と陽性者のサポートを実現しようと念願していた。彼らの純粋でかつ強い思いの実現に我々が協力できることは一つの喜びである。むしろ逆に、我々に協力することの喜びをもたらしてくれるほど、彼らの思いは純粋かつ強いものであったと言えよう。

アフリカ、特に我々の行く先の地は貧しい。しかし、そこに住む人々、特に現状を改善しようと努力する人々、貧しい人々に思いを寄せる人々の心に、我々は心を洗われるように感ずる。彼らの心が我々を惹きつける。彼らは、我々が忘れ去った原始的なあるいは本源的と言っていい感覚を我々の心の中に蘇らせてくれる。アフリカの地では人々の絆は深く強い。共同性が今も根強く残っているし、息づいている。自然との共生も、物質的には貧しいのであるが精神的な豊かさを感じさせてくれる。素朴な笑顔、壁や駆け引きのない心の交流、単純で心の奥底から表現される喜びの感情、自然な思いやり、これらの全てが無条件に我々の心を瑞々しくし、満たしてくれる。毎年アフリカを訪れたくなる大きな理由である。

Gem 村からナイロビに移動した夜に、ナイロビにある中華料理店でケニアに 30 年以上在住している獣医の神戸先生と夕食を共にした。神戸先生は今年 10 月名古屋で開催される Cop10 の会議に参加されるという。ケニアを愛し、知りつくし、その自然を愛している神戸先生の我々の活動に対する応援は、とても心強い。神戸先生の教えを請いながら、我々の活動をすすめていきたい。

帰国前日に、ナイロビにあるコロゴッチョスラムを訪れた。讃岐さんが現地の NGO の人々と協力して、HIV 陽性者の自立支援活動をしているスラムである。その NGO のリーダーである Rosemary の話を聞いた。彼女自身 HIV 陽性で、一時期かなり病気が進行した時期もあったが、今では抗 HIV 薬が効を奏し、5 人の子供を養いながら元気に働いている。弱冠 31 歳の、一見したところ華奢な女性であるが、その精神の強さと輝きには圧倒された。東京から来た若い女性の医師が彼女の話を聞いている時に思わず涙したが、誰しもが同じ思いを抱いたであろう。過酷な人生、決して容易ではない活動、貧しさとともに危険が隣り合わせのスラム、改善には程遠い医療環境、こうしたものを背負いつつも彼女はあきらめることなく自分の信念に従って生きる。「HIV 陽性者の自立支援」が彼女の生涯のテーマであるが、それを日本人の讃岐さんが自分の人生を賭けて協働している姿には心打たれる。Rosemary と讃岐さんの曇りのないその心と生き方は美しい。

9月25日土曜日は帰国の日である。飛行機は午後4時40分なので、午前中の時間を利用してナイロビ郊外にあるナイロビライオンズクラブの病院を訪問した。一宮-中ライオンズクラブの仲立ちで昨年4月にも訪問した病院である。事務長さんが快く我々を歓迎してくれた。実はケニアに発つ前に事務長さんに連絡を取り、Gem村で発生した注射器や針あるいは採血用試験管などの医療廃棄物の処理をこの病院にお願いしてあった。この病院は様々な廃棄物を処理する高熱発生装置を有しており、我々の活動の支えになっている。また、この病院は貧しい患者さんからは一切治療費を受け取らない。医師一人当たりの患者数もとてつもなく多く、日本の医師も見習わなければならない。不可能と思える診療をこの病院は実施している。日本の医療の甘えの部分が思い起こされた。

一沫の寂しさを心に秘めながらケニアを発ち、翌日の26日日曜日夜10時過ぎに名古屋駅に帰り着いた。ほとんど休みのない強硬なスケジュールの11日間であった。本当に皆さん頑張ってくれた。名古屋医療センターの服部さんと東京の薬剤師の石川さんは、Gem村で行われたHIV検査を一手に引き受けて奮闘して下さった。Gem村からキシイの500円のホテルに帰ってからも、夕食後眠い目をこすりながらも毎日2時間半から3時間かけて採血してきた血液のHIV検査を実施したのである。名古屋の石川さん（アサンテナゴヤの理事長）は体調が優れないのにもかかわらず、毎日鍼灸の治療に励まれた。東京から参加した若い内科、小児科、眼科の医師3人も、慣れない土地での前線医療を本当に熱意をもって実施して下さった。多くの問題意識を抱いたことと思うが、それらを是非今後の課題とし、その改善に向けて努力していきたいと思う。アサンテナゴヤの岩崎さんには、今回のケニアの旅の準備からGem村での食事の用意まで、我々の活動の基礎を支えてくれた。Gem村での3日目の昼食に、日本から持って行ったカレーのルーと現地の野菜や肉と現地の米で作ったカレーライスの味は、本当に格別であった。疲れた我々の心身をこの一食が生き返らせてくれた。特に、今回初めて参加した東京の医療者にとっては、このカレーライスは救いになったのではないかと思われる。食事がこれほどの喜びと満足を与えてくれるとは、我々の予想を完全に超えていた。渇きこそが素晴らしい充足と喜びを与えてくれることを改めて学んだのである。

今回のケニアにおける活動は、長い道程の最初の一歩である。幸い、現地のNGOメンバーとのe-mailによる交流も可能になった。また、今回の活動を通して、現地の人々と我々の気持が一体化したような感覚を持てるようになった。今この原稿を書いている時でも、ダグラスの涼しく優しい眼差し、牧師さんの話した言葉、ウイリアムが我々のチームを危険から守ってくれたこと、など懐かしく思い起こされる。彼らは我々の友人であり、尊敬の対象となる人々である。今後は彼らの要請に従って、我々の活動を組み立てていきたい。我々にできることは限りがある。成果は小さいかもしれない。

長い時間を要する活動になると思われるが、静かに彼らとともにやり遂げていきたいと思う。外部から課せられた義務ではなく、自ら選択した道として。なぜなら、ケニアでの活動は我々自身にとっても価値のある、学ぶことの多い活動であるからである。この活動の機会を与えてくださった讃岐さんには重ねて心から感謝するとともに、引き続きご指導ご支援をお願い申し上げる次第である。

事務局　岩崎奈美

9 月のケニアの大地は硬く、昨年 4 月の柔らかい土の感触とはまったく違うものでした。空の様子も毎日午後 2 時を過ぎる頃から遥か向こうの空は真っ黒、時々稲光が光ります。私の頭の上の空は真っ青でその違いに見とれていました。1 時間もすると真っ黒な雲はもうすぐそこに迫っています。あっと言う間に大粒の雨が辺りを覆い、私も木々も、辺り一面なにもかもが大地の自然に包まれた瞬間でした。

今回、現地の食材を畑で調達させていただいたり、村の 1 坪ほどの商店で「ウガリ」（現地主食：とうもろこしの粉）や路上で売っているバナナ（生涯で一番美味）の買い物をしました。それは必要に迫られての行動で、一人おろおろしている私を現地 NGO の婦人達や、道を歩いている人々がその都度助け舟を出してくださって無事、事なきを得たのです。愛知県稲沢市から参加された上田ご夫妻の心優しい一言や現地の方の笑顔や思いやりが心細い私を支えてくださいました。頂いた気持ちに到底及びませんが、現地の方が健やかな生活を続けられるための何かお手伝いができたらと思います。

皆様のご理解とご協力によりケニアへ渡航し、無料医療キャンプを開催することができました。心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。今後ともご支援の程、お願いいたします。

【事務局便り】

＊今年度の事業のひとつとしてお知らせしました、井戸掘削の本格的な検討が始まりました。井戸掘削についての進捗状況はホームページでお知らせする予定です。

＊10 月末日、アフリカ基金、愛知モリコロ基金へ助成金申請書を提出いたしました。（返答待ち）

＊平成 22 年 10 月 16 日（土）「神戸俊平先生」講演会の様子をクラス通信（愛知淑徳中学校 1 年 1 組）に 2 回続けて掲載いただきました。1 回目の通信には「レアメタル産地・追われるゴリラ」の新聞記事も同時に紹介され、サバンナの野生生物の現状から象牙の不買運動などが中心の記事、2 回目にはクラスの生徒さんが書かれた、像のイラスト（説明付き）が！アフリカの現状を子供達に伝えてくださって、ありがとうございました。

＊会費、賛助会費、協賛及び寄付金をいただいた企業・団体および個人（敬称略）

（株）ｱｲｺｰﾒﾃﾞｨｶﾙ・AOI 募金・ｱｲｴﾑｴｲｸﾞﾙｰﾌﾟ（株）柴部眞知夫・青木孝夫・青木孝・青山純也・赤澤ヒロ子・浅野鐘喜
新井和子・医）石田整形外科　石田義人・飯田喜久江・石井圭子・石井美栄・石川佳子・石黒保美・石黒博人
石黒正則・石原裕・市野健二・一宮中ﾗｲｵﾝｽﾞｸﾗﾌﾞ・伊藤昭・稲垣やよい・稲垣由紀子・今枝美穂子・平野雪夫
植木敏子・植田美奈子・内海眞・江崎節子・近江恭子・大沼れい子・岡本裕子・小川賢二・小木曽悠紀子・小木曽義治
尾関利勝・片岡紀子・片桐初男・加藤大介・加藤弥生・河野サトコ・北村ます美・久保頼子・栗村清子・栗村道夫
国際ｿﾛﾌﾟﾁﾐｽﾄ名古屋中・榊原一良・榊原純夫・佐野朝江・佐野考宏・佐野春臺・島岡喜代次・清水清美・杉本みな子
ｽﾏｲﾙﾖｶﾞ（松下）・住友正武・住友光子・高村幸子・高山眞・田中由紀子・谷井佐知子・丹井忠雄・丹井弘子
中日新聞社会事業団（一宮中ﾗｲｵﾝｽﾞｸﾗﾌﾞ）・土屋久仁子・寺嶋美容室・ﾄﾞﾘﾝｸｽ倶楽部ｼﾞｪﾑｿﾝ・長久手ﾃﾆｽ同好会
中林春壹・中山善博・西川慈子・西山英子・野村浩子・野村みち子・畑中孝・服部敬司・服部将也・深川善治
福井玲子・藤井忠幸・水谷裕子・見田くるみ・宮本信代・森下理香・八馬加代子・山内礼子・山際加代・山田晴生
山本直彦・山本由紀・脇田かおり・ﾜｸﾜｸ募金・岩崎奈美

上記は 2009 年 10 月 1 日から 2010 年 12 月 3 日までにご支援いただいた皆様です。

2010年度9月渡航

行　程　表			
9/16（木）	15:00～18:00	名古屋駅→関空　無料シャトルバス	
9/17（金）	23:15～4:45	関空発⇒ドバイ着	東京組合流
	11:45～16:45	ドバイ発⇒ナイロビ着	予定時間より1時間遅れ
	18:00	ナイロビ発⇒キスム行き	国内線乗換
	19:00	キスム着⇒キシ（バス移動）	讃岐氏、現地NGO合流
	22:30	キシ到着（キシ泊）	
9/18（土）		GEM EAST（キシ泊）	無料医療キャンプ
9/19（日）		GEM EAST（キシ泊）	無料医療キャンプ
9/20（月）		GEM EAST（キシ泊）	無料医療キャンプ
9/21（火）		GEM EAST（キシ泊）	無料医療キャンプ
9/22（水）		GEM EAST（キシ泊）	無料医療キャンプ
9/23（木）	5:30～8:00	キシ⇒キスム（バス移動）	
	9:15～10:00	キスム発⇒ナイロビ着（ナイロビ泊）	
9/24（金）		コロゴッチョスラム（ナイロビ泊）	＊コロゴッチョスラム訪問・無料診療 ＊神戸俊平先生と会食
9/25（土）	16:40～22:40	ナイロビ発　ドバイ着	午前：ﾗｲｵﾝｽﾞ病院訪問
9/26（日）	3:10～17:20	ドバイ発⇒関空着	
	19:00～22:30	関空→名古屋駅　無料シャトルバス	

＊2011年度の渡航は2011年9月15日（木）～9月25日（日）を予定しています。無料医療キャンプ、井戸掘削、子ども達の支援の継続に今後ともご支援の程、よろしくお願い申し上げます。

事務局：名古屋市東区葵1-25-1　ﾆｯｼﾝﾋﾞﾙ906　TEL/FAX：052-933-1588

ホームページアドレス：http://asante-nagoya.com